



Title	フランス17世紀の情念論の諸断面(1) : 序論的考察 : J.-F. Senault, De l'usage des passions を概観しながら
Author(s)	黒岡, 浩一
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1995, 29, p. 71-83
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47820
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランス17世紀の情念論の諸断面 (1)

—序論的考察：J. -F. Senault, *De l'usage
des passions* を概観しながら—

黒 岡 浩 一

はじめに

本論で言う *passion* とは、イエス＝キリストの「受難」の宗教的意ではもちろんなく、また、19世紀のロマン派などにより強調された内面的生の発露として「情熱」「熱情」の意でもなく、身体的影響を伴いしばしば理性の行使を妨げる、抑制し難い「情念」(感情)の意である¹⁾。17世紀、フランスでは、この情念について盛んに論じられ、数多くの情念論が出版された²⁾。我々の試みは、大きくは、それらの情念論が内包する、あるいは投影する当時の思想状況の諸断面を明らかにすることにある。本論では、その試みの序論的考察として、スノー Senault (ジャン＝フランソワ Jean-François), *De l'usage des passions* (1641)³⁾ を概観することにより、当時の諸情念論の成立基盤の一端を明らかにしてみたい。

スノーは、1601年(?)アントワープで生まれ、ドゥエ、パリで教育を受けた後、17歳でオラトリオ会 L'Oratoire に入信、説教師として名を馳せ (Bossuet や Voltaire から高い評価を得ている)、また、オラトリオ会創始者 Bérulle の片腕として会派の運営に活躍し、1663年には総長になり、1672年に昇天するまで、その会の拡大に大きく貢献した。彼の著作は、「説教集」、「聖人伝」、「神学・道徳的著作」の3つに大別され⁴⁾、*De l'usage des passions* は第三の部類に属する。また、彼の属したオラ

トリオ会は、科学や文芸の探究を重視して Malebranche や Richard Simond 等の著名な知識人を輩出し、Henri Bremond がその大著で《l'Ecole française de spiritualité》と呼んだアウグスティヌス派の会派である⁵⁾。

1. 情念擁護論、キリスト教護教論としての *De l'usage des passions*

当時の情念論一般の論点は、各々の情念の描写・説明は別として、主に、情念の定義、生理学的説明、諸情念間の秩序（基本情念およびその派生としての個々の情念との区別）、道徳的見地からの統御論などである⁶⁾。スノーでは、情念の定義はトマスのそれが継承されている⁷⁾。生理学的説明は殆どない⁸⁾。基本情念（あるいは原初情念）については、アウグスティヌスの立場⁹⁾を主張しながらも、第Ⅱ部の構成から明らかなように、実際は、トマスの立場¹⁰⁾を継承する。

以上のトマス主義の継承にもかかわらず、スノーの情念論の独自性は、原罪を軸とするアウグスティヌスの人間観と恩寵の神学とに基づいて¹¹⁾、その題が示すように、情念の「用い方 usage」を論じる点にある。実際、序文では次のように述べられる。

Car encore que les Passions soient déreglées, et que le Peché les ait reduites à un estat, où elles sont plus crimminelles qu'innocentes ; Neantmoins la Raison avec la Grace les peut employer utilement, et sans les flater j'ose dire à leur avantage, qu'il n'y en a point de si méprisable qu'on ne puisse changer en une glorieuse vertu ; On peut leur oster ce qu'elles ont tiré de la Nature corrompuë, et leur rendre la pureté, qu'elles avoient pendant l'état d'inno-

cence ; Il ne se presente point d'occasion où elles ne puissent donner des combats, et remporter des victoires en faveur de la vertu ; et pourveu qu'on les sçache donter, il sera facile de vaincre tous les vices avec elles : Car ils proviennent de leurs desordres, et nous ne commettons point de peché, qui ne doive sa naissance à leur revolte ; C'est pourquoy je puis assurer que toute la Morale est comprise en cette partie, et qu'enseignant l'usage des Passions, j'enseigne tous les moyens de rendre l'homme vertueux. (p. 28)

この引用の論旨は次の5点にまとめられる。

- 1) 原罪の結果自然・本性が腐敗したことにより、情念は不秩序で罪あるものとなった。
- 2) 情念の不秩序から悪徳が、情念の反乱から罪が生じる。
- 3) しかし、恩寵を伴った理性により、どんな情念でも有益に活用し徳とすることができる。このことは、情念を腐敗した自然・本性から解き放ち、原罪以前の無垢な状態に純化することである。
- 4) 情念は徳への闘いの機会であり、情念を治める術があれば、情念により容易に悪徳に打ち勝てる。
- 5) したがって、情念の用い方とは、人間が徳あるものとなる手段そのものである。

以下では、スノーが本論に入って展開する議論をみながら、この5点について見ていく。

原罪による自然・本性の腐敗は、当時ではジャンセニスム jansénisme により徹底して強調されたアウグスティヌスの主張である。I—2—一三で、余白にアウグスティヌスを引用しながら、この腐敗は、これを認めなかつ

た古代哲学者を批判することにより、強調されている。スノーは、原罪の結果を「肉体の精神への反逆 *la revolte de la chair contre l'esprit*」(p. 78) と捉え、この反逆がもたらす心身間の不秩序が情念の不秩序の原因とする。

2)と5)は二律背反的である。情念は、不秩序であるならば悪徳の原因でありながら、用い方によっては徳となるからだ。実際、I—4(表題《*Du commerce des Passions avec les vertus et les vices*》)では、情念が、「徳の種」である(pp. 117-122)と同時に「悪徳の種」である(pp. 122-126)ことが論じられる。

この相対する2面性は、スノーの情念論において、一つに情念擁護の、もう一つにキリスト教護教の、要となっている。情念に囚われる人間は悪徳をなしたり罪を犯すので、情念は悪徳の種である。スノーは、アウグスティヌスを引用して、このような情念の源は「肉欲 *concupiscence*」である、とする(p. 85)。しかし、スノーは次のように述べる。

D'où j'infere, que puisque la grace ne peut éteindre la concupiscence, elle ne peut ruiner les Passions, et que toute l'assistance que l'homme en doit esperer, c'est de les ménager avec tant d'adresse, qu'elles défendent le party de la vertu, et qu'elles combattent celui du vice. (p. 86)

スノーの恩寵観は後にふれるとして、肉欲を源とする情念は、肉欲が消滅されえない故に根絶されえないが、肉欲とは異なり、徳を擁護し悪徳と闘うように巧みに節制されうる。すなわち、情念は、肉欲を源とする「悪徳の種」であるが、恩寵により、その悪因を断ち切り、「徳の種」として、先に4)で見たように徳への橋渡しの役割をも担うのである¹²⁾。これがスノーの情念論のダイナミズムであり、ここに先の5)が確立するのである。

この発想に基づき、第 I 部冒頭で展開されるように、スノーは、自らの情念論を、情念の擁護論——情念を「魂の病」とみなしその根絶を主張するストア派に対する擁護論——として提出しようとしているのである。

ところで、スノーは序文を始め多くの箇所、異教の哲学者たち——ストア派のみならず、プラトン、アリストテレス、エピキュロス派——の見解を批判検討しながら、彼等ではなくキリスト教こそが理性や自然・本性、精神と肉体との関係を真に認識し (pp. 27-29, pp. 47-50, etc.), 先の 5) に見られる真の道德を可能にすることを主張する。

Il faut donc que la Morale, pour être utile, soit Chrestienne, et que les vertus qui doivent regler nos Passions, soient animées de la Charité pour s'acquiter de leur devoir. (p. 31)

スノーの情念論は、16世紀に復興し17世紀に（後に見るようにスノーにも）多大な影響をもたらしたネオ＝ストイシズム *néo-stoïcisme*¹³⁾ の人間観・情念観へのアンチテーゼとして、また、その影響だけでなくルネッサンスのもたらしたユマニズムの影響の中でのキリスト教護教論として、自らの情念論を展開しようとしているのである。

les Chrétiens font un bon usage de leurs Passions s'ils les employent pour la gloire de Jesus-Christ, et pour le salut de leurs ames : (p. 131)

2. スノーのストイシズムとユマニズム

先の 3) すなわちスノーの恩寵観と恩寵を伴った理性による情念統御論に移ろう。これらの点で、スノーの情念論は、今見てきた厳格なアウグスティヌス主義、反ストア主義とは異なる様相を呈する。恩寵を伴った理性

が情念を有益に活用し徳とするとは、恩寵により情念が原罪以前の無垢な状態に純化されることであった。スノーは、I—1—15で、原罪により恩寵を失う以前のアダムの無垢なる状態では魂と肉体とが協調関係にあったこと (pp. 66-67) を説明した後、次のように言う。

il [=Adam] usoit aussi de ses passions, parce qu'elles étoient une partie de son ame; et qu'enfin elles n'étoient pas différentes des nôtres par leur nature, mais par leur obeïssance.
(p. 69)

原罪以前の情念とそれ以後の情念との相違は、本性上の相違ではなく、人間への従順さの相違でしかない。したがって、恩寵の情念への効果とは、情念が従順になることである。

ils [=les hommes dans l'état du péché] ont besoin de la Grace qui les soulage et qui leur donne des forces, sinon pour les délivrer entièrement de l'Ennemy qui les tourmente, au moins pour leur rendre la liberté d'agir, et les mettre en un état où ils puissent pratiquer les vertus, combattre les vices, et regler leurs Passions.
(p. 81)

恩寵の効用は、原罪により肉体の抵抗を被っている人間に行動の自由を与えること、人間が徳を実践できる状態にすることである。特筆すべきは、この恩寵は、アウグスティヌスが主張した「絶対的に効力のある恩寵 *grâce efface*」というよりも、それと対立する モリニズム的な「助力の恩寵 *grâce suffisante*」である¹⁴⁾。

更に、アウグスティヌス主義でも原罪以前の善性の痕跡が魂に残っていることを認めているが、スノーは、それを拡大解釈したように、「人間の

本性の内奥をみれば、その本性は善性を全く失わなかった si nous la [= la nature de l'homme] considerons donc en fonds, elle n'a rien perdu de la bonté」(p. 80) と述べる。スノーは、先にみたように原罪の結果を単に「肉体の精神への反逆」と捉え、魂はその内奥で善性を十全に保持している、と考えるのである。しかも、先の引用の少し後で、イエス＝キリストによる贖罪が人間にもたらした恩寵について、次のように述べる。

La Grace qui nous en acquiert le droit, reside dans le fonds de notre ame, et la sanctifiant, laisse le corps engagé dans le péché; Elle commence l'ouvrage de notre salut, et ne l'acheve pas; (p. 82)

来世での救済の権利を与えるイエス＝キリストの恩寵は、人間の魂の内奥にあり、我々の救済という御業を始めている、とスノーは考えている¹⁵⁾。

したがって、スノーが情念統御に不可欠とする恩寵とは、人間の魂の内奥に潜む「助力の恩寵」なのである¹⁶⁾。17世紀中葉にイエズス会 jésuites とジャンセニスムの間でなされた神学上・道徳上の激しい対立・論争¹⁷⁾を思い出すと、本論前半で見たスノーに於ける自然・本性の腐敗や恩寵の必要性、また彼が度々典拠とするアウグスティヌスから、一見、彼はかなりジャンセニスムに近いアウグスティヌス派に思えるが、その内実を検討すると、むしろイエズス会に近いと言わざるを得ない。

この傾向は、I—3 (表題《De la conduite des passions》) で彼が具体的に情念統御論を展開するとき、より一層強まる。彼が主張してきた原罪の結果としての「肉体の精神への抵抗」や恩寵の必要性への言及は、なくなるわけではないが、弱まり、それらに代わり、「自然 la Nature」を積極的に評価した言及が現われる。自然の持つ有益性を主張したのであ

る。

Bien que la Nature soit si liberale, elle ne laisse pas d'estre ménagere, et d'employer avec utilité ce qu'elle a produit avec abondance. Toutes ses parties ont leurs usages, et parmy ce grand nombre de creatures qui composent l'Univers, il ne s'en trouve point d'inutiles : (p. 107)

また、スノーは、「情念を操るためには緩和する必要がある Qu'il faut moderer nos Passions pour les conduire」(I-3-三, p. 103) を論じる際に、《il faut imiter la Nature》(p. 104)、《la raison doit imiter la Nature》(p. 105) というように、「自然を模倣する」ことを強調する。

自然の有益性および自然の模倣は、元来、ストア派の標語である¹⁸⁾。 *De l'usage des passions* では、そこで展開されるストア派批判にもかかわらず、総数370に及ぶラテン語著作の引用中151がセネカからの引用である¹⁹⁾。スノーは自らストア派批判を展開しアウグスティヌス派を標榜しているにもかかわらず、J.-E. d'Angers が指摘しているように²⁰⁾、彼の情念論にはストア派の影響が色濃く反映されているのである。

続く第四説(表題《Qu'en quelque état que soient nos Passions, la Raison les peut conduire》)で情念の統御法を論じる際には、「情念の誤謬を直す corriger leurs erreurs」(p. 109)や「情念が不秩序などどんな場合でも悪意よりも誤謬が多いのである dans tous leurs desordres il y a plus d'erreur que de malice」(p. 110) というように情念を誤謬としたストア派的な用語を用い、恩寵の必要性は全く触れられず、原罪についてもその負の遺産よりもそこに残された善性のみが述べられる。情念統御を論じる段階に至り、スノーの情念論は、ストア派の影響をうけながら、

原罪にもかかわらず人間に残された善性を全面にだし、ユマニズム的色彩²¹⁾を強くするのである。

むすび

スノーは、アウグスティヌス主義に基づく原罪による自然・本性腐敗と恩寵の必要性とをスローガンに、16世紀に復興したネオ＝ストイシズムの影響下の時代の中でストア派に対する情念の擁護論として、ルネッサンスがもたらしたユマニズム的傾向に対するキリスト教護教論として、情念論を展開しようとした。しかし、同時代に同じスローガンを掲げたジャンセニズムを念頭において彼のスローガンの内容を検討するとき、その内容はジャンセニズムよりもむしろその論敵イエズス会に近く、彼の主張には彼が批判対象としたストイシズムとユマニズムの傾向がしばしば色濃く反映されている²²⁾。

このことから、当時の諸情念論が成立している基盤の一端が伺えるように思われる。すなわち、情念論では道德上の問題として情念の統御が論じられるが、その議論は、理性あるいは意志の行使のなにかの十全性あるいは善性を肯定するユマニズムの立場にあることを前提とする。もしその立場に立たずに情念論を展開するとどうなるのか？ ラ・ロシュフコー La Rochefoucauld やバスカル Pascal にみられるように、情念を統御していると思うこと自体すでに情念に囚われているので、情念を論じる以前に、常に何らかの情念に囚われている人間の悲惨さを語ることで尽きてしまうことになる。皮肉な事に、文学史上「モラリスト moraliste」とよばれる深い人間洞察を綴った文筆家は、道德を論じた情念論の論者ではなく、彼等なのである²³⁾。

情念論は、その作者が標榜する派にかかわらず、人間本性の善性・十全性を認めるユマニズム的傾向を内包する。そして、その点で、情念論は、

当時ジャンセニズムとイエズス会により激しくかわされた人間本性と恩寵という表裏一体の問題に関わる。更に、情念論は、生理学、心理学は言うまでもなく、当時の言語学あるいはレトリックの問題そして政治学にも関わる。スノーを含めて当時の諸情念論は、これらの観点からの再検討を待っている。

注

- 1) passion は、原義的には、「能動 action」に対する「受動」である。この点については、本論では割愛するが、中世のスコラ哲学でも (E. Gilson, *Index scolastico-cartésien* (Paris, Vrin), 1979, p. 8, 《action 10》参照), 17世紀でも (*Dictionnaire universel* de Furtière, 《passion》の第一義, Descartes, *Les passions de l'âme*, Art. 1 などを参照), 意識されている。尚, passion の概念および語義については、次の2つの辞書が手軽に有益な情報を提供してくれる。 *Les Notions philosophiques Dictionnaire* (Paris, PUF), 1994, t. 2, 《passion》: *Dictionnaire historique de la langue française* (Paris, Le Robert), 《passion》。
- 2) 当時出版された諸情念論の書誌については、やや不十分であるが, Levi, S. J. Anthony, *French moralists. the theory of the passions. 1585-1649* (Oxford University Press), 1964 に譲って、本論では参照するもの以外は割愛する。
- 3) この書は第Ⅰ部「情念一般について」、第Ⅱ部「個別の情念について」の二部構成で、前者は5つの、後者は6つの論 *traité* を含み、各論は4～6つの説 *discours* からなっている。本論での引用参照は、J.-F. Senault, *De l'usage des passions* (Paris, Fayard), 1987 (rééd. de l'éd. 1669) を用い、頁数のみを記す。また、部はローマ数字で、論はアラビア数字で、説は漢数字で示す(例えば、第Ⅰ部第2論第四説 = I-2-四)。
- 4) スノーの著作の分類については、G. Ferreyrolles, "De l'usage de Senault: apologie des passions et apologétique pascalienne" in *Corpus*, N° 7 (1988), pp. 3-15 (特に pp. 4-5) を参照。
- 5) Cf. Bremond, *Histoire littéraire du sentiment religieux en France* (Paris, Plon), 1916-1933, 11 vol. et Index (reprint, A. Colin, 1967), tome III-1, pp. 141-198。
- 6) 情念一般・個々の情念の描写・説明はこれらに含まれるとするにしても、

この他に、歴史的に見て情念論の中で重要な要素として、アリストテレスの『弁論術』に端的なレトリックの要素や、マキャベリをはじめとしてホッブスにおいて明確に意識される社会論や政治学などの基礎論としての要素がある。しかし、17世紀フランスの諸情念論では、これらの要素には、意識されながらも、必ずしも焦点が当てられていない。だが、広田昌義氏がかねてから論じておられるパスカルに於ける「想像力」の問題が提示するその社会観・政治学、また、Ferreyrolles, *Pascal et la raison du politique* (Paris, PUF), 1984 や、最近では Lazzeri, Christian, *Force et justice dans la politique de Pascal* (Paris, PUF), 1993 などに見られるのと同じ仕方、17世紀フランスの諸情念論から投影される政治学を丹念に検討する必要がある。これらについては、別の機に触れることにする。尚、スノーの政治学とレトリックについての検討の重要性を Ferreyrolles が示唆している (Cf., Ferreyrolles, “De l’usage de Senault”, pp. 12-14).

- 7) スノーの定義 (p. 52) は、トマスの定義 (*Summa*, I a—II æ, q. 22, a. 3) あるいはそれに基づいたスコラの教科書 (Cf., Gilson, *op. cit.*, p. 206) をそのまま継承している。
- 8) スノーとは異なり, Coëffeteau, Nicola, *Tableau des passions humaines* (1620), Cureau de la Chambre, Marin, *Les Caractères des passions* (1640-1662), Descartes, *Les passions de l’âme* (1649) などでは、詳しく生理学的説明がなされており、当時の諸情念論に於ける生理学を研究テーマとした論文 (Riese, Walther, *La théorie des passions à la lumière de la pensée médicale du X V II^e siècle* (Bâle, S. Karger), 1965) もある。
- 9) 「愛」が第一かつ最初の情念であり、他の情念はその派生に過ぎないという立場である (Cf. アウグスティヌス『神の国』第十四巻第七章)。
- 10) 「魂の感覚的欲求 *appétit sensitif de l’âme*」を2つに分け、「欲求的 *concupiscible*」部分の情念として「愛」／「憎しみ」、「喜び」／「苦しみ」、「希望」／「絶望」の6つ、「気概的 *irascible*」部分の情念として「欲望」／「逃避」、「大胆さ」／「恐れ」、「怒り」の5つ、計11の情念を基本情念とする立場である。トマスの情念論は、*Summa theologiae*, I a—II æ, qu. 22-48 で展開される。
- 11) *De l’usage des passions* におけるアウグスティヌス主義とトマス主義との混在については、Le Guern, Michle, “Thomisme et augustinisme chez Senault” in *Corpus*, N° 7 (1988), pp. 21-30 で論じられている。

- 12) この点については、既に、Le Guern が次のように示唆している。《la concupiscence implique les passions, mais ce n'est pas une implication réciproque.》(*Op. cit.*, p. 29).
- 13) ネオ＝ストイシズムの研究については、古いが、Zanta, Lénotine, *La renaissance du stoïcisme au X V I^e siècle* (Paris, Champion), 1914 がある。その17世紀への影響については、D'Angers, Julien-Eymard, *Recherches sur le stoïcisme aux X V I^e et X V II^e siècles* (New York, Orms), 1976 が詳しい。
- 14) この点については、Ferreyrolles が既に指摘している。Ferreyrolles, "De l'usage de Senault", p. 5. 因みに、「助力の恩寵」とは《une grâce donnée généralement à tous, soumise de telle sorte au libre arbitre qu'il la rend efficace ou inefficace à nos choix, sans aucun nouveau secours de Dieu et sans qu'il manque rien de sa part pour agir effectivement》(Pascal, *Œuvres complètes* (Paris, Seuil, 1963, p. 375) であり、ジャンセニストはこの恩寵を否定し、「絶対確実に infailliblement」に実効するが人間の自由意志を犯すことはない「効力のある恩寵」を主張した (*Ibid.*, p. 464). 当時の恩寵論については、J. Laporte, *La doctrine de Port-Royal: les vérités de la grâce* (Paris, PUF), 1923 および Pascal, *Œuvres complètes* (Paris, Desclée de Brouwer), 1991, t. 3, pp. 597-602 が役立つ。
- 15) ここからうかがえるように、スノーは、「救霊予定説 prédestination」の点でも、ジャンセニズムからほど遠い。
- 16) Levi は、スノーの恩寵論は当時では神学上非常に問題をはらむものであった可能性を指摘している (Cf. *op. cit.*, p. 224).
- 17) イエズス会は、トマスが展開した人間学と16世紀に台頭したネオ＝ストイシズムの影響下、モリニズム molinisme の立場から、原罪により grâce は失ったが必ずしも腐敗していない人間本性の自力と grâce suffisante とによる善行の実行および救済を主張し、他方、ジャンセニズムは、厳格なアウグスティヌス主義の立場から、人間本性は腐敗しているが故に、grâce suffisante を否定し grâce efficace のみを認め、善の実践は、後者の恩寵とその恩寵ゆえに必ず自ら善に向かってしまう意志とによるとした。この論争が本格化する契機となった出版物 Jansenius 著 *Augustinus* (1640) をスノーは préface 執筆の時点で読んでいたと、Levi は、論述の仕方の共通点から、推測している。Levi, *op. cit.*, p. 215.
- 18) Cf., Rodis-Lewis, Geneviève, *La morale stoïcienne* (Paris, PUF), 1970,

pp. 20-23.

- 19) Cf., Miloyévitch, Voukossava, *La Théorie des Passions de P. Senault et la morale chrétienne en France au X V II^e siècle* (Paris, L. Rodstein), 1934, p. 136.
- 20) Cf., d'Angers, "Le stoïcisme dans le traité *De l'usage des passions* de l'Oratorien Senault (1641)" in *Revue des sciences religieuses*, t. 25 (1951), pp. 40-68.
- 21) 本論で言う17世紀のユマニスム l'humanisme とは, Henri Gouhier が《anti-humanisme》と定義したジャンセニスムなどの厳格なアウグスティヌス派と対立する, 当時蔓延していた思想傾向のことである. Cf., Gouhier, *L'anti-humanisme au X VII^e siècle* (Paris, Vrin), 1987.
- 22) Ferreyrolles は前掲論文でスノーをパスカルの先駆者と看做している (*Op. cit.*) が, 本論の考察から明らかなように両者には大きな隔たりがあるように思われる.
- 23) この点については, 文体の問題も関わる. それを含め「モラリスト」については, *Moralistes du XVII^e siècle*, éd. J. Lafond (Paris, Robert Laffont), 1992, pp. I-XLI を参考にした.

(文学部助手)